

次号予告

特集 頸髄損傷

頸髄損傷の筋電図……………慶応大月が瀬リハセンター 蜂須賀 研 二
 頸髄損傷の移動能力……………九州リハ大学校 中 山 彰 一
 頸髄損傷者に関する調査（下半身衣料を中心として）

……………都心障センター 寺 山 久美子
 頸髄損傷の肺理学療法……………神奈川リハセンター 安間 治和・他
 頸髄損傷患者の排尿処理に関する看護……………伊豆通信病院 木 下 洋 子
 頸髄損傷者の就労問題（東京コロニーの実験から）

……………東京コロニー 調 一 興

とびら 発展途上国に対するリハビリテーション技術援助

……………東京都補装具研究所 加倉井 周 一

講座 統計学 5. 某疾患に2種類の治療を行った場合の

治癒率の比率……………横浜市大 杉 田 暉 道

老人 3. 老人と生きがい……………東京都老人研 井 上 勝 也

プログレス 社会リハビリテーションの動向……………国立身障センター 奥 野 英 子
 リハビリテーション・インフォメーション

日本理学療法士協会……………東京女子医大 北 目 茂

日本作業療法士協会……………日本作業療法士事務局

あんてな 八王子自立ホーム……………日本大学 野 村 敏

編集後記

希望の「臨床教育」についての特集号をお届けできることを、編集者の一人としてうれしく思っている。この号では臨床教育について、PT、OT 教育の現場における苦勞・悩み・問題点がかなり率直に、本音で論じられているので非常に興味深い内容となっている。教育経験をお持ちの読者諸氏は、これを読まれるとその内容の一つ一つに心当たりがあり、また意見、反論も続出することが予想される。

この特集を読んで筆者の正直な感想を言わせて頂くと、学校の立場の人と臨床の立場の人との間にこれほど明確なギャップがあるとは思わなかった、ということと、もう一つは、我が国でも PT、OT 教育の揺ぎのない基盤が出来つつあるんだな、ということである。

“学生の教育”という一つの目的に向けて、学生に望まれる PT、OT 像を共通の目標として設定し、実行されている臨床教育には、良いチーム・ワークが不可欠で、そこからより良い教育効果が期待できるものと思う。チーム・ワークにはメンバー間

の信頼関係が第一に必要となる。親が自分の子供をあまり信頼できない人にあずけることがあるとしたら子供に何らかの犠牲を強いることは覚悟の上であろう。通常はその犠牲を最少限に食い止めるために、より信頼できるよう、いろいろ工夫し、努力の限りをつくすであろう。この特集が糸口となり、もう一步踏み込んで信頼のもつれがほぐれるよう願っている。両者とも画一的な対応ではなく、より経験豊かな方が他者を補い導くというリーダーシップも必要とされよう。

講座「統計学」は分散分析法で、杉田氏は血圧や ROM を例題に解説されている。講座「老人」は大森氏による精神衛生で、老年期の精神障害の分類・疫学・症状・治療について解説されている。復習に利用されたい。

本年度の学会も間近かに迫り、理学療法士・作業療法学会それぞれに17回、16回目を迎えるに至っている。掲載されたプログラムからも年毎の充実が伺われる。

（福屋 靖子）

<編集顧問>

天 児 民 和
 九州労災病院名誉院長

五 味 重 春
 埼玉県生活福祉部

砂 原 茂 一
 国立療養所東京病院名誉院長

津 山 直 一
 東京大学教授・整形外科

水 野 祥太郎
 川崎リハビリ学院長
 （五十音順、以下同じ）

<編集委員>

上 田 敏
 東大リハビリ部

荻 島 秀 男
 リハビリテーション・イン
 イン（痛み）クリニック
 かわらび診療所

大喜多 潤
 兵庫県リハビリセンター

寺 山 久美子
 都心身障害者センター

富 岡 詔 子
 山梨日下部病院

奈 良 勲
 金沢大学医療技術短大

福 屋 靖 子
 筑波大学

松 村 秩
 都養育院リハビリ部

<編集同人>

安 達 克 己

池 田 俊 雄

伊 東 元

宇都宮 初 夫

大 丸 幸 翼

鎌 倉 矩 子

紀 伊 克 昌

木 村 信 子

駒 沢 治 夫

佐 藤 肇

嶋 田 智 明

鈴 木 明 子

関 昌 家

高 橋 正 明

中 屋 久 長

橋 元 隆

藤 沢 しげ子

矢 谷 令 子

山 下 隆 昭

（担当 細田・西塚）